2 熊本県轟貝塚出土の打製靴型石器について

江坂 輝彌

1966年３月、筆者が中心となり熊本県宇土市轟（とどろき）に所在の宮ノ荘貝塚を発掘調査した際、筆者らがＤ地区と名付けた地区の、縄文文化中期の阿高（あたか）式土器を出土する貝層中から、図１左下に示したような打製石器が発掘された。

右下のものもＤ地区からの出土品である。なお同様な形のものが、今回の発掘調査で阿高式土器の文化層から、他にも数点出土している。

この種の打製石器の国内における出土例は、小生寡聞のためもあるかと思うが、ほとんど知られていないのではなかろうか。中国浙江省杭州付近の老和山、太湖南岸呉興付近の銭山漾両遺跡からは、図２の１、２に示したような類似した形の打製石器が出土している[1]。

一般に靴型斧というと、東南アジアの東山文化に伴う青銅斧をさしており、この青銅斧とは全く関連性がないものとみてよいのではなかろうか。

図１の左下の石器は高さ15.5センチ、最大幅16.5センチ、厚さ最大部で3.2センチほどあり、石質は安山岩質の岩石である。図１上写真左下の石器の尖った右端（下写真は同一物の背面、従って左端）は打裂面が磨滅している。これは使用痕と考えられる。上部を手のひらで握って、尖端を鶴はしのように土につきさして、土を掘り起こす土掘り具ではなかろうか。

図１右下のものは高さ11センチ、最大幅11.5センチ、厚さ最大部2.2センチほどの大きさのものであり、石質は安山岩質の岩石である。左下のもと同様に尖端部は磨滅し、上部を握って鶴はし状に土掘り具として使用したものと考えられる。

図１上の写真はかつて乙益重隆氏が、十字形石器として発表したものと同型のもので[2]、十字型の一端を欠いている。この打製石器は長径15センチ、厚さ1.6センチほどの大きさで、下段の石器と同質の安山岩質の岩石でつくられている。この石器も十字の残された三つの先端が、使用のため磨滅している。この種石器も、各先端を交互に土掘りに使用したものであろうか、直角の一端を握り、直角一端を土にさしこむと、上段写真の靴型打製石器同様、鶴はしのように使用できるわけである。

今回の発掘調査で、以上に記した二種の打製石器が、西九州地方に広く分布する縄文土器文化中期の、阿高（あたか）式土器に伴うものであることを確認したことは一つの大きな収穫であった。

十字形石器は乙益氏によって、阿高式土器の退化的なものか、後期末の御領式土器に伴うものではないかとされ、熊本県人吉地方に約五例、同県菊池郡泗水村に一例、大分県直入郡入田村（現在竹田市に編入）に一例の出土例が報告されている。

筆者は愛媛県上浮穴（かみうけな）郡美川（みみかわ）村上黒岩（かみくろいわ）岩蔭遺跡の第一次調査の折り、同郡久万町の、当時、愛媛県立久万高等学校に在職された松本重太郎氏蒐集の資料を拝見したのであったが、その中に久万町笛ヶ滝遺跡発見という十字形石器が二点あった。

これも図３右、中央の写真に見るように、先端部は使用のためか、磨滅していた。また一点、図３のように、三頭のものも見られた。笛ヶ滝は縄文土器文化早期の押捺文土器と、後期中葉から晩期の時期の土器を出す遺跡であり、これらの石器は後期か晩期の土器に伴ったものと考えられる。

以上の事実で、十字形石器は縄文土器文化後期に入ると、その分布圏が四国地方にまで拡がることがわかり、恐らく今後、山口・広島県下などの後期の遺跡からも発見されるのではなかろうか。

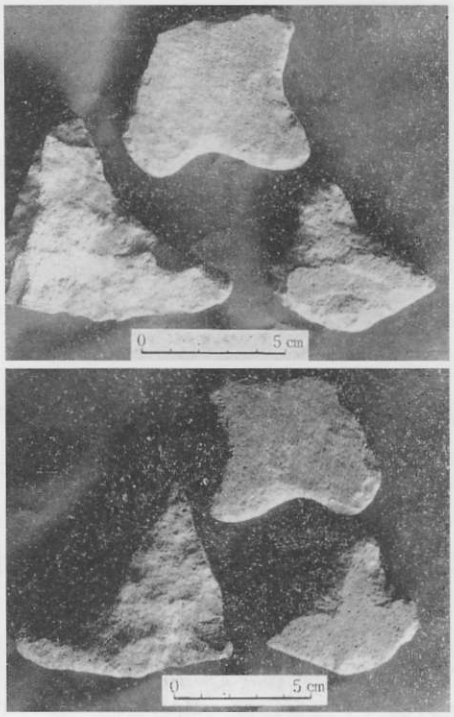

図１　熊本県宇土市轟貝塚出土、打製靴型石器と十字形打製石器

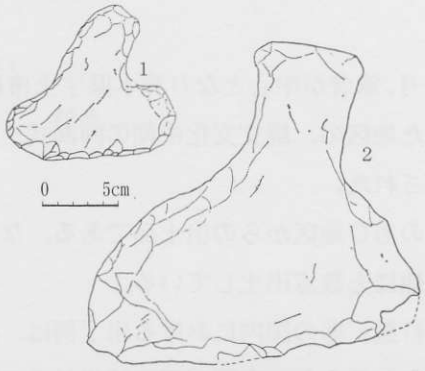

図２　１．浙江省銭山漾遺跡出土、打製石器
２．老和山遺跡出土、打製石器

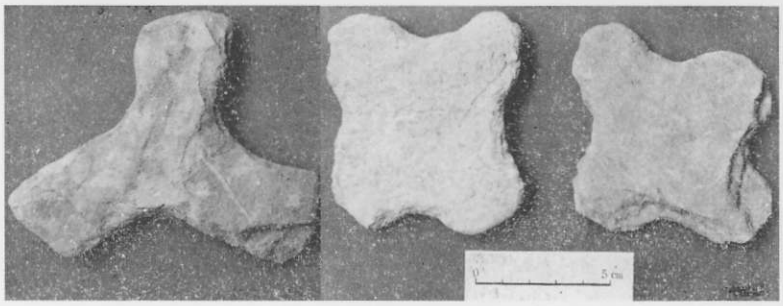

図３　愛媛県上浮穴郡久万町笛ヶ滝遺跡出土、十字形打製石器

縄文土器文化中期に、関東地方西部から中部地方にわたって多くの打製石器が出土し、これが土掘り具であり、食用植物の芋、球根類の採集用具であるとの考えは、ほぼ誤りないものと推察される。そして一歩進めて食用植物の球根類の植付け、植物栽培用の原始的な農耕具ではないかとの推論もされてきている。しかしこのような打製石器類が、関東地方西部から中部山岳地方の限られた地域にのみ多出するもので、他地域にはあまり見られないという事実が、中期に原始的な農耕が始まったのではないかとする仮説に対し、大きな障害となっていたわけである。ところが西九州地方の、縄文土器文化中期の阿高式土器に、土掘り具と考えられる数種の打製石器が存在することが明らかになると、自から考え方も変ってくる。以上の事実だけで入墨、滑車型耳飾などとともに、縄文土器文化中期に、江南地方から山芋・水芋・里芋などの類が渡来したであろうという推定が立証し得たとは思わないが、この発見は将来の研究に重要な示唆を与えたように考えるのである。

浙江省杭州付近発見の、前記した類似の形の打製石器は、中国の学者は石包丁型磨製石器（いわゆる石包丁）と同様に、石刀と称呼しているが[1]、同形の刃部が磨製されているものは、柄の付いた穂づみ具で、石包丁型石器と同一用途のものと推察されるが、図２に示したような打製石器は土掘り具ではな

かろうか。銭山漾遺跡からは、周辺竜山文化より古い時期の遺物が出土しているようであり、注意を要する。浙江南部から福建・広東・広西省方面の古期新石器時代文化の遺物が明らかになると、稲作以前の植物栽培の文化が、西北九州地方に縄文土器文化の時代のいつ頃渡来したかという問題も、比較的容易に解明されるのではなかろうか。

打製靴型石器が西九州地方で縄文土器文化中期の時期にあらわれ、これが鶴はし状に使用する土掘り具であるらしいという事実は、注意すべき新発見であるが、今日判明したのは轟貝塚における数例のみであり、今後西九州地方における他の阿高式土器出土遺跡における出土例、発見状況なども考慮し、また周辺大陸における全く同型の打製石器の出土例の有無などを明らかにしない限り、これ以上の推考も困難であり、今後の調査研究の発展にまちたい。

（1）浙江博物館編『浙江新石器時代文物図録』新華書店　1958年。
（2）乙益重隆「南九州における特殊石器」『上代文化』第15輯、昭和17年。